

## 敵討ち物としての『望月』 ―面影と機縁の物語―

同志社大学教授

山田 和人

『望月』は、守山の旅宿で、従兄弟に本領争いの結果殺害された安田の莊司友春の妻子が敵望月秋長を、いまは旅宿の亭主となつて、かつての家臣小沢刑部友房の助力を得て見事討ち果たす物語である。能の中では珍しい『放下僧』と並ぶ敵討ち物として知られている。もちろん、他にも『二人神子』や『比良』など番外曲も残っているが、

前掲の『望月』、『放下僧』は現在も伝承されている敵討ち物である。

今回、廣田鑑賞会能で取り上げられる『望月』は、かつての家臣小沢刑部友房を廣田幸稔が、孫の明幸が敵を母とともに討つ子方花若を演じる。このふたりが息を合わせて演じるのに、最適の演目と感ぜられる。その理由は、本曲に登場する友房と花若の間には、主従を越えた関係がある。ふたりが対面する場面のクドキでは、子方(花若)は友房を見て「父に逢ひたるこちして、花若小沢に取り付けば」とあり、花若は友房に父を重ねる。友房も「別れし主君の面影の、残るもいまは懐かしや」と花若に主君を重ねる。わざわざこうしたクドキの場面を設けるのは、この対面が、いわゆる主従の忠義の物語というよりも、情愛でつながる父子の面影を浮かび上がらせる劇的な物語であることを示している。主君の敵を討つために、助力者を設定して、その助太刀で敵を見事に討ちおせるのだが、その助力者に父の面影を重ねていくところに本曲の独特の味わいがある。

『望月』の特徴をまとめていえば、母と子の敵討ち物語であること、

また仕えていた家臣友房の助力によつて敵討ちが全うされること、そして、母が「盲御前」と身をやつし、子花若は八撥(羯鼓)を討ち、友房は獅子舞の芸を見せ、敵友春が油断したところを討ち取るという場面が一番の見せ場である。

こうした特徴を敵討ち物という大きな枠組のなかでとらえてみると、能の敵討ち物の特徴がある程度浮かび上がる。敵討ちとしては『曾我物語』、『仮名手本忠臣蔵』、『伊賀越道中双六』、『彦山権現誓助剣』、『基太平記白石噺』など多くの作品が知られている。『曾我物語』は言うまでもなく、五郎、十郎が艱難辛苦の果てに父の敵工藤祐経を富士の巻狩で討ち取る物語である。『仮名手本忠臣蔵』は、主君塩谷判官の敵高師直を討つべく、お家断絶後の大星由良之助をはじめとする忠臣義臣の苦難に耐える姿を描き、最後に師直屋敷に討ち入り本懐を遂げる物語である。このように敵討ちが成就するまでの艱難辛苦の物語という側面がある。

『伊賀越道中双六』は、いわゆる伊賀越えの敵討ちで、沢井股五郎の奸計によつて殺された父和田行家の子志津馬が、敵の股五郎を唐木政右衛門の助力を得て、伊賀上野で討ち果たす物語である。そこに幼いときに別れた息子の十兵衛と父平作の再会、志津馬を恋する娘お米(傾城瀬川)のために一身を擲つて敵の居所を開き出そうとする父平作の親子の情愛を織り込んだ横筋の「沼津」が名場面として

知られている。「彦山権現誓助劍」は、京極内匠の手にかかった吉岡一味齋の敵を討つために、姉妹とその子が流浪を重ね、艱難辛苦の果てに毛谷村六助の助力を得て、見事に敵を討ち果たす物語である。だが、妹のお菊は返り討ちに合つてしまい、残された息子弥三松を六助が養育することになる。京極内匠は親孝行な六助を巧みにだまして、剣道師範をかけた六助との試合で手心を加えてもらい勝利する。その後、親孝行の話もすべて偽りであったことが露見し、姉妹と子の敵討ちに六助も加わり、内匠を討ち果たす。「碁太平記白石噺」は、石堂家の重宝を奪いお家横領を企てる志賀台七に斬り殺された父の敵を討つために、姉妹が艱難辛苦を経て、ふたりの敵討ちに助力する者たちに助けられながら、見事本懐を遂げる物語である。そのうちでも、別れ別れになった姉妹が再会する七段目の「揚屋」はいまも人気を博している。家のために身売りして吉原で廓奉公する姉の宮城野と、江戸に上つて姉とともに敵を討とうとする妹おのぶの健気な覚悟は胸に響く。その心意気に心を動かされる揚屋の惣六がふたりのはやる心を「曾我物語」の敵討ちになぞらえて焦ることなく備えるようにと頼もしい助言をしてふたりの敵討ちの成就を祈る。

これらの近世の敵討ち物は、それぞれに改作物を生み出し、仇討ち物の系譜をなしていく。これらには共通する展開が見出される。まず、敵に殺害される発端場面が必ず描き出される。その後、家族の別離と流浪、漂泊の旅が始まる。やがて、家族は互いに再会もしくは助力者と出会い、敵討ち成就への道が開ける。敵討ちの場面で見事に敵を討つて、本領を安堵されて大団円を迎える。

また、敵討ち物には旅の物語という面がある。それは逃げる敵を

追う主人公たちの流浪と漂泊の旅の途中でさまざまな艱難辛苦に遭遇し、そこで助力者の助けを得て、自らの運命を切り拓いていく力強い人物造型がある。ある意味で、敵討ち物は、旅の文芸であり、敵を求めて漂泊する艱難辛苦の物語でもある。「望月」ならば、敵に討たれた妻子が街道筋の守山宿でかつての忠臣と、そして討つべき敵と再会する。その意味では本作は別離と再会の物語とも言える。その舞台となる街道筋の股賑を極めた守山宿にある旅宿という場面設定こそ、旅の結節点としての役割を果たすものと言える。

近世の敵討ち物の展開を見た上で、能の敵討ち物を見ると、いささか奇異な面が指摘できる。もちろん、詞章の長さの違いは当然あるものの、それ以上に、近世の敵討ち物では肝心な敵がいかにして父を討つたのか、その後家族はどのような喜勞を重ねてきたのか、こうしたプロセスを避けていることに気づく。「望月」の場合、「いとこの望月と口論し、あへなく討たれ給ひて候」とあるのみであり、同じく敵討ち物である「放下僧」も「利根の信俊に討たれて候」とある。両方ともに、あへなく討たれてしまったという類型的な表現に止めっており、具体性に欠ける。能の敵討ち物では、敵討ちに関わる経緯や事情についてあえて触れないという姿勢が見て取れる。討たれた後の流浪と漂泊は詩的な道行文として物語られ、その間の憂き苦勞は観客の創造力に委ねられるということでもある。

そして、助力者である友房もまた敵から命を狙われる仕儀となり、守山宿に止まり、甲屋という旅宿の主人となっていた。そこに偶然かつての主君の妻子が守山宿の自分の宿に泊まることになる。その間の出来事をツレが物語る。守山宿に至るまでの旅を下ゲ哥、上ゲ哥

でツレと子方が語る。その後、母と子花若と友房が対面し、互いに名乗り、「機縁」の深さに感じ入る。この対面の場面は冒頭に記したとおりであり、花若は肉親のように友房を見ており、友房もまた花若に主君の面影を見ている。主従関係を越えた肉親同士のそれに近い再会が「機縁」としてもたらされたことが本作の特徴と言える。不思議な縁で結ばれた主従の絆であり、それはあまりに深い肉親のような情愛でつながっている。忠義、忠孝を越えてつながる人と人の絆としての主従と云うべきであろう。これはきわめて中世的な主従のつながりと言わなければならない。

なお、能の敵討ち物は、敵を討つまでの艱難辛苦のプロセスではなく、敵を討つその場面、その瞬間にすべてを集約していく。そして、敵を欺く方略として諸芸を披露してみせることが、後半の躍動感に満ちた芸尽くとして舞台を彩ることになる。本作の「盲御前」に扮して語る演目が『曾我物語』であることもおもしろく、「一萬箱王が親の敵を討つたる所を唄はふするにて候」「七つ五つになりしかば、稚き身の心にも、父の敵を討たばや」とはやる心が見え隠れする。そして、友房は敵を前にして「いざ打たう」と構える花若を押し鎮め、「暫く何を御騒ぎ候ぞ、いざ打とうと申すは八撥を打たうと申す事にて候。八撥を御打たせ候へ」とその場を取りなすところも緊迫感に満ちた目の離せない場面である。八撥に続けてシテの獅子舞は金剛流の舞いの迫力を存分に味わうことができる場面である。

ところで、能の敵討ち物に最も近い内容と形式を持っている作品を挙げるならば、それは沖繩の組踊「二童敵討」であろう。最近では、今年三月十日に国立文楽劇場で上演された。護佐丸の遺児である鶴松、亀千代が母の許しを得て、親の敵で、天下を狙うあまおへ（阿麻和利）

を野遊びの酒宴で討ち取る計略をめぐる。あまおへから踊りを所望され、ふたりは踊る。あまおへは上機嫌となり、団扇と太刀を鶴松に、来ていた着物を亀千代に与える。丸腰となったあまおへを兄弟は見事に討ち取り、祝儀の踊りで終わる。このように組踊「二童敵討」は、護佐丸を討ち取ったあまおへを兄弟が宴席で踊りを見せて油断させ、見事に討ち取るという『望月』や『放下僧』の芸尽くしの展開とも近似的。両者の間には類縁関係が指摘できるだろう。能の敵討ちがこのようにして沖繩の地に残っているのは実に興味深いことであり、現在能としてスピーディーに展開し、敵を討ち取る兄弟のけなげさが際立つわかりやすい展開は琉球使節にも好評を得たのではないかと推量される。琉球使節は大坂では竹田からくりなどパフォーマンストとして楽しめる演目を好んだようであり、能の敵討ち物はそうした琉球使節を介して、沖繩の地で受容され、新たな展開を遂げたのかもしれない。

今回は、花若を廣田明幸、友房を祖父である廣田幸稔が演じる。そこにこうした強い絆が、それぞれが演じる八撥（羯鼓、獅子舞の氣迫となつて舞台上浮かび上がってくる）ことだろう。その後の敵を討つ場面の緊迫感をしのぐ氣迫と強い絆を目の当たりに見せてくれることだろう。いましか見ることのできない劇的な瞬間がそこには醸し出されることだろう。観客はそれに立ち会うことができる幸せを実感することだろう。